日本音楽学会 2023 年度音楽関係学術イベント開催助成金（第 2 期採択）

シンポジウム「アジア・太平洋戦争期の滞日ドイツ人音楽家：その活動と日本音楽界への影響」

傍聴記

内藤　多寿子

2024 年 3 月 31 日、昭和音楽大学で、科研費シンポジウム「アジア・太平洋戦争期の滞日ドイツ人音楽家：その活動と日本音楽界への影響」が開催された。酒井健太郎氏（昭和音楽大学）が主催し、トーマス・ペーカー Thomas Pekar 氏（学習院大学）と洋楽文化史研究会が共催した本シンポジウムは、アジア・太平洋戦争期に日本の西洋音楽の発展に貢献したクラウス・プリングスハイム Klaus Pringsheim （1883～1972)、ジョゼフ・ローゼンストック Joseph Rosenstock （1895～1985)、エタ・ハーリヒ＝シュナイダー Eta Harich-Schneider （1894～1986)、マンフレート・グルリット Manfred Gurlitt （1890～1972）などのドイツ人音楽家や「プラーゲ旋風」によって 1930 年代の日本音楽界を震撼させたヴィルヘルム・プラーゲ Wilhelm Plage （1888～1969）らに焦点を当て、彼らが来日した背景と日本での活動において、これまであまり知られてこなかった側面を明らかにした。プログラムは、当初予定されていた所要時間（5 時間）を超える膨大なものだったが、内容は非常に充実していた。第一部は亡命移民研究や近代以降の日本音楽史研究に従事するペーカー氏、赤塚愛氏（学習院大学)、ラルフ・アイジンガー Ralf Eisinger 氏（音楽学)、高久暁氏（日本大学)、長木誠司氏（東京大学）の各氏による講演と、沼野雄司氏（桐朋学園大学）の司会による講演者のディスカッションで構成された。第二部はプリングスハイムとグルリットの声楽作品、および信時潔（1887～1965）のピアノ作品を取り上げたミニ・コンサートで、西原稔氏（桐朋学園大学）が解説した。日本音楽史の専門家はもちろん、若手研究者から他分野の専門家まで、幅広い年齢層と多岐にわたる分野の研究者が来聴し、会場は多くの参加者で賑わっていた。

シンポジウムの冒頭、酒井氏とドイツ大使館のクラウディア・シュミッツ Claudia Schmitz 氏による開会の挨拶の中で、酒井氏が本シンポジウムを企画した経緯が語られた。酒井氏は数年前からプリングスハイム研究に従事しているが、アイジンガー氏の著書 *Klaus Pringsheim aus Tokyo: Zur Geschichte eines musikalischen Kulturtransfers* (München: IUDICIUM, 2020) を読み、著者へ直接コンタクトを取ったことが、本シンポジウムの契機となった。そして、アイジンガー氏の来日に合わせて本シンポジウムを企画、

実現したとのことだった。また、本シンポジウムの開催に合わせて、プリングスハイムの孫から届いたメッセージも紹介された。「祖父やその他の滞日ドイツ人に関心を持ってもらえて嬉しい」という言葉から、滞日ドイツ人音楽家の遺族も本シンポジウムの成果に期待を寄せている様子がうかがえた。

一人目の講演者であるペーカー氏は “Overview of German Exile and German Musicians in Japan in the Asia Pacific War Era （第二次世界大戦時代のドイツ亡命者と日本のドイツ音楽家の概要）”というタイトルで発表を行なった。ペーカー氏は、本シンポジウムの講演者たちがとる基本的な立場について、ローゼンストックの自伝を例に説明した。すなわち、ローゼンストックは、自伝の中で、自らの亡命やユダヤ人としての出自には言及せず、単なる指揮者や移住者のグループの一員として自身を位置付けた。しかし、ペーカー氏はローゼンストックを歴史的文脈から位置づけようと試みる。そして、この自伝を再解釈する必要性を説いた。二人目の講演者、赤塚氏の発表は「アジア・太平洋戦争下の日本におけるユダヤ系音楽家受容——指揮者、ジョゼフ・ローゼンストックと新交響楽団を中心として——」というタイトルで、ペーカー氏の発表を補足する形で行なわれた。赤塚氏は、ローゼンストックが来日した経緯を、多くの言説を引用しながら簡潔に示した。特に、来日当初は好意的だったローゼンストックの評価が戦況の悪化とともに変化し、やがて、彼と一緒に活動していた日本人にまで非難の矛先が向くようになった経緯についての説明は非常に明解だった。第一部前半最後の講演者はアイジンガー氏で、タイトルは “Joseph Rosenstock–A Restless Life （ジョゼフ・ローゼンストック——彷徨の生涯——）” だった。アイジンガー氏は、ローゼンストックの来日以前の足跡と戦後の活動を四つの日付（①1914 年 6 月 28 日、②1933 年 1 月 30 日、③1946 年、④1989 年 7 月 16 日）に基づいて整理し、発表した。ドイツ、アメリカ、日本で指揮者として活躍したにもかかわらず、最近まで、ローゼンストックは日本以外では忘れられた指揮者であった。しかし、近年、この指揮者の再発見・再評価が始まりつつあるという話が印象的だった。

15 分の休憩を挟んで、第一部後半が開始した。しかし、この時点ですでにプログラムの進行が一時間以上遅れていたため、高久氏と長木氏の発表に十分な時間が確保されなかったのが非常に残念だった。高久氏の発表は「エタ・ハーリヒ＝シュナイダーの日本：1940 年代とその後」だった。リヒャルト・ゾルゲ Richard Sorge （1895～1944）の最後の交際相手の一人として一般に知られるハーリヒ＝シュナイダーが持つ 5 つの側面、すなわち①音楽家として、②日本音楽の研究者・日本学者として、③翻訳家として、④ドイツ文

学史・社会史・演劇史において重要人物を輩出した一族として、⑤時代の目撃者・証言者としての側面と、ハーリヒ＝シュナイダー研究の現状、および太平洋戦争期の日本における彼女の演奏活動の概要が取り上げられた。高久氏は、ハーリヒ＝シュナイダーの功績として、ヨハン・ゼバスティアン・バッハ Johann Sebastian Bach （1685～1750）の《ゴルトベルク変奏曲》（1741～42）と《音楽のささげ物》（1747）の日本初演を紹介した。加えて、ハーリヒ＝シュナイダーの演奏活動に関する詳細な資料調査によって明らかになった、当時の滞日ドイツ人社会が抱えていた問題とその複雑さにも言及した。最後の講演者、長木氏は「『プラーゲ旋風』前夜とその後」というタイトルで発表した。長木氏によれば、プラーゲと「著作権」の最初の接点はヴィルヘルム・フリードリヒ大学（現フンボルト大学）の法科学生時代に受けた授業にあった。長崎ドイツ領事館の日本語通訳や旧制松江高校のドイツ語教師として勤務した後、ハンブルク大学で博士号を取得。そして、ポリドール社のレコード原盤輸入契約に通訳として立ち会ったことをきっかけに音楽著作権へ目覚め、再来日。旧制松山高校のドイツ語教師を経て、1931 年、東京に法律事務所を開設し、「プラーゲ旋風」を巻き起こした。しかしながら、プラーゲが設定した高額な著作権使用料は、日本国内のみならず、ドイツの著作物輸出産業にも大きな弊害となった。1939 年に大日本音楽著作権協会が設立され、「著作権に関する仲介業務に関する法律」が制定されると、プラーゲは日本国内での仕事を失った。そして、1940 年、旧満州の都市・奉天に「東亜コピーライト」事務所を開設し、日本を去った。

続くディスカッションも大幅に時間が短縮され、テーマは、講演では大きく取り上げられなかったグルリットの紹介に集約された。司会者と各講演者からグルリットの生涯と、ローゼンストックとハーリヒ＝シュナイダーとの関係について一言ずつ発言があった。そして、グルリットはユダヤ人家系に生まれながらも、当時迫害を受けた多くの他のユダヤ人たちとは異なる、特殊な立場にあったことが指摘された。

第二部のミニ・コンサートでは、木村優実氏（ソプラノ）と川村沙耶香氏（ピアノ）がプリングスハイム作曲の声楽作品、すなわち《ヴェネツィア Venedig》 Op. 24（1903）と《3 つの歌 Drei Gesänge》Op. 25(作曲年不詳)より二曲(〈たそがれ時 Dämmerstunde〉、〈朝に Morgens〉)、そして、グルリット作曲のオペラ《ナナ Nana》（1932／1958）の抜粋を演奏した。また、山下暁子氏（ピアノ）は信時潔作曲のピアノ作品《自作の主題による変奏曲》（1920）を演奏した。西原氏の解説によれば、プリングスハイムの歌曲集《3 つの歌》の中で、〈朝に〉は最も完成度が高い。しかし、閉会後に演奏者が述べていたとこ

ろによれば、h^1–gis^2 の長六度の上行音型で始まり、半音階的和声に基づいて進行していく歌唱部を「歌いこなすのは非常に難し」く、高度なテクニックが要求される曲であった。エミール・ゾラ Émile Zola （1840～1902）原作によるグルリットのオペラ《ナナ》は、女優・歌手・高級娼婦であったナナの自由奔放な人生を描いた物語である。ナナは取り巻きの男性を次々に破滅させていくが、その後、彼女自身も没落し、天然痘で亡くなる。この作品には音高の高低差の激しいパッセージが頻繁に現れるが、演奏者は見事に表現していた。信時の《変奏曲》は、信時がドイツ留学中に作曲した作品である。西原氏によれば、グルリットはこの作品を「海外放送向け」に演奏したことが分かっており、実際、1940 年 2 月 9 日にラジオ放送された。主題と 6 つの変奏からなるこの作品は短いテーマと対旋律という一見単純な構造を持つが、テーマの周囲には常に重厚な和音が配され、演奏者に高度な分析力を要求するものであった。ピアニストの優れた読譜力に裏打ちされた演奏が第一変奏、第二変奏…と進むにつれて、作曲家が留学中に学んだ成果を最大限反映させようと腐心している姿が思い浮かび、非常に興味深かった。

閉会の挨拶で、酒井氏が「（前半に講演、後半に演奏を聴くことによって）立体的に当時の状況を見ることが出来たのではないか」と述べたように、来場者からは「講演は滞日ドイツ人音楽家たちの生涯に関する話が中心だったので、最後に作品を聴いたことで、全体として非常に充実していた」との声があった。加えて、「日本の洋楽受容史で必ず名前が挙がる滞日ドイツ人音楽家たちの研究がまだほとんど進んでいない」現状に驚きの声もあった。また、「プラーゲ旋風」に関して、「単なる歴史的事実として認識していた時はなんて非情なのだろうと思っていたが、長木氏の講演を聞いて初めて、プラーゲの人間性を感じることが出来た」との意見もあった。本シンポジウはアジア・太平洋戦争期の日本西洋音楽史の動向に焦点を当てたものではあったが、時代やジャンルの垣根を超えて、研究にはミクロの視点とマクロの視点を同時に持つことの重要性と、日本で西洋音楽に携わること、研究することの意義を改めて考えさせる、大変貴重な機会であった。